

目次

その一 平安貴族は猫とおしゃべりした

古典のなかの猫さまざま 7

あなたは猫派？／日本最古の猫文学 空海／鼠を捕まえる猫、続々と／天皇陛下は猫がお好き／偉い人でも猫の下僕／かわいい猫をお母さんに／意識高い系猫好き 清少納言／迷い猫に乙女の妄想炸裂／猫はほとんど人間だった



その二 猫のおかげで始まる恋もある

いたずら猫と『源氏物語』 37

いたずらさえも愛しくて／日本最高の猫文学 『源氏物語』／光源氏、姪っ子と結婚する／ナイスミドルの年の差婚／危険な恋のきっかけは猫のいたずら／恋しい人を「見て」しまった！／身代わりちゃんこ強奪大作戦／ちゃんこ使いの名手紫式部／夢のなかにもあの猫が／光源氏の社交的パワハラ／あるとき猫がいなければ



その三 平安時代、猫は鼻の穴だった

和歌のルールと少女漫画 66

猫うた千年の謎／少女漫画は鼻の穴がきらい／猫は「鼻の穴」あつかい？／猫うた、やっと登場！／日本最初のノラ猫／猫うたの歴史を変えた源頼政／和歌はフィクションだ／恋する猫とお坊さん／米粒写経でイノベーション／「お約束」は進化していく

その四 猫まつしぐら 『源氏物語』の恋

鎌倉・室町時代の猫うた 95

そっけなさがない猫の愛／流行歌にも登場、ねずみソング／連想で染しむ「猫×柏木×女三の宮」／連歌の猫は『源氏物語』の香り／虎の巻まで『源氏』まみれ／ビジュアル重視「猫に牡丹」／猫の連歌は『NANA』？／能の屁理屈、柳といえは猫／猫をにおわせ 連歌師の和歌／猫日記『寛平御記』の真実／正徹、猫フライドを胸に秘めて

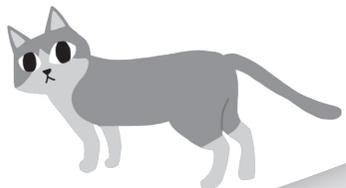


その五

猫にも恋の季節がやってきた

江戸前期の俳諧と「猫の恋」 127

おふざけ連歌「俳諧」の登場／クスッと系猫うたの革命／「猫は魚にまっしぐら」の発見／おふざけが足りない教養系俳諧／猫が恋する「源氏」のパロディ／燃えつきるまで猫の恋／新人芭蕉、試行錯誤の猫うた／芭蕉の革命、しょぼくれ猫の切なさ／かっこ悪い恋だから、かっこいい／恋を覚えた猫たちは



その六 猫がいるだけで愛しくて

江戸後期の俳諧と和歌 159

恋模様さまざま、江戸の猫／「思ひ寝」に耳をびくびく／ちよっと物足りない蕪村の猫／恋してないのにアンニュイな猫／「人間の恋」にはもう飽きた／「源氏」の猫は恋に落ちない名脇役／恋する猫は国境を越える／浮気をしかられるオス猫／婚活下手なゃんこたち／オスはみんなバカで愛らしい／恋する猫が文学史を変えた／恋なんかしなくても猫はカワイイ／ただカワイイから猫を詠む



その七

舶来猫は魔性の香り

明治以降の猫うた 191

猫うたの文明開化／明治の猫はあるがまま／猫うたはセンスで詠め／愛を込めてペロペロを／白秋、めくるめく倒錯の世界／猫の魔性を描いたポードレル／「魔性の猫」という新しい型

エピソード 214

寒がり、ものぐさ、漢詩の猫／猫のいるところ、かならず文学あり

あとがき(と補足) 219

